

最近の外壁改修用塗料の動向 Trends of Repair Coatings for External Wall

田村 昌隆

要 旨

ここ数年来、塗料・仕上塗材の分野に関しては、新築物件が減少し、既存建築物の改修物件が増えつつある。戸建て住宅の新築物件に関しては建材ボード類による乾式工法が多くなっているが、改修に関しては戸建て住宅の建材ボードの塗装改修はもちろん、既存の建築仕上材として、アクリルリシン（外装薄塗材 E）、アクリルタイル（複層塗材 E）などの外壁を塗り替えるケースが多くなっている。特に現在は“補修・再補修（ストック活用の時代）”と言っても過言ではない。また近年、地球規模においてさまざまな環境問題が取り上げられている。内装用塗料はもちろん、外装用塗料についても安全性の面から、水性化が急速に進められてきた。このような情勢も踏まえ、ここでは外壁改修用塗料の動向について説明する。

キーワード：塗料、仕上塗材、改修、低汚染形塗料、親水性

1. 塗料・仕上塗材の現況

塗料・仕上塗材業界では、建築ストックの増大を背景として、改修市場の確保と機能性を重視した適切な材料の提供が重要となっている。冒頭でものべたが、塗料・仕上塗材のリフォーム市場として重要な外装改修材料について、かねてよりトップコートの水系化を推進し、平成5年には建設省の建築工事共通仕様書において、複層仕上塗材の上塗材を原則水系とすることが明記された。日本建築仕上材工業会の統計によれば、当時（平成5年）の溶剤系上塗材と水系上塗材の比率は約75%対25%であったが、継続して水系化を推進してきた結果、現在ではそれが逆転し、約25%対75%となっている。現状では現地で施工する仕上塗材については、水

性または弱溶剤系の市場となっており、環境対応が業界として進められていることがわかる。

2. 外壁改修市場の現状

近年、塗料・仕上塗材の外壁改修市場において、平成15年 JIS A 6909 に規定された可とう形改修仕上塗材 E がよく使用されている。この仕上塗材は、水性の主材と上塗材から構成されており、比較的工程数が少なく、作業性並びに使い勝手に優れている。統計によれば、他の仕上塗材は生産量が減少している中、ここ2年を除けば、生産量を伸ばしている。塗り替え前の外壁旧塗膜は施工から長い年月を経ており、ハガレ、チョーキング、変退色だけでなくワレ等も生じていることが考えられる。このため旧塗膜に十分密着し多少のクラックに追従できる、下地調整材の機能も備えた主材が必要となりこの材料が開発された。

表層に来る上塗材としては、市販されている水性、弱溶剤系のほとんどの材料が幅広く使用

2017年12月28日受付
TAMURA Masataka
ロックペイント株式会社 東京技術部
市場開発グループ